

## キュウリ枝成型品種の栽培に関する研究

(第2報) 生育並びに収量に及ぼす夜温の影響

利光泰郎・野口敏治・永松栄子

(大分県農業技術センター)

施設栽培の枝成型白いぼキュウリに対する夜間温度の影響を品種との関連で検討し、さらに、変温管理の温度設定について試験を行ったので報告する。

## 1. 試験方法

試験1 第1図に示した4品種を1977年1月10日には種し、ヒシフォリアに接ぎ木して、2月17日に空調ガラス室のプラスチックポットに定植した。仕立て法は主枝1本仕立てで床面上160cmで摘心し、子づるは1~2葉、孫づるは1葉で摘心した。夜温は活着後から10、12及び14℃に設定した。日中は26℃を目標に管理した。

試験2 “王金促成”を1978年1月11日には種し2月17日に空調ガラス室に定植した。夜温の設定は変温A区(日没~22時 15℃, 22~6時 9℃, 6時以後 15℃)変温B区(日没~22時 15℃, 22~6時 12℃, 6時以後 15℃)及び12℃区とした。仕立法と日中の温度管理は試験1と同様である。

## 2. 結果及び考察

試験1 主枝の生育は各品種とも、14>12>10℃の順で早まったが、14℃区で正常な形態を示したのに対し、10℃区では本葉の展開が遅れ、節間が短かった。品種間では、“王金越冬”及び“くるめ春”の節間が各処理区で伸びているのが目立った。主枝の雌花着生数は、夜温が低い区で節数が多いため増加する傾向にあったが、“ときわ光3号P”では14℃でも雌花がよく着生した。側枝の発生は14>12>10℃の順で多かった。10℃では側枝数が著しく少なく、発生率は30%程度であった。

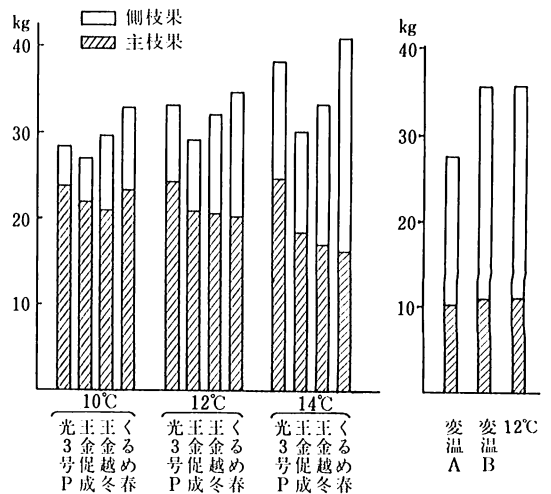
総収量はいずれの品種でも14>12>10℃区で、品種間では“くるめ春”が多かった。主枝果の割合は、夜温が低い区で多く、側枝果の割合は逆に夜温が高い区で多くなる傾向があるが、“ときわ光3号P”では14℃区でも主枝果の割合が高く、主枝の成り戻りが夜温の影響を受けていることがうかがわれた。上果率は14及び12℃で高く、10℃では低い。品種間では“王金促成”の果形が整っており、10℃区ではやや低下したが、12℃と14℃区で

は差がなかった。変形果の発生は10℃区で多く発生した。

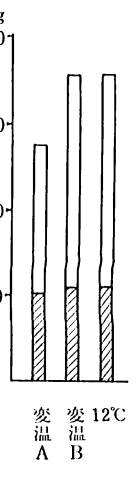
試験2 主枝の生育は変温B>12℃>変温A区となり変温B区で正常であったのに対し、変温A区はややカンザシ気味となった。側枝の発生は変温B区で早く、そろいもよかった。変温A区では発生が遅れた。

総収量は変温B区が最も多く、区当たり(5株)35.5kgで、12℃区とほぼ同じであった。変温A区はそれより20%減収した。側枝果の割合は60~70%で変温B区が高い。上果率も同様変温B区が高く50%であった。変形果の発生は変温A区及び12℃区で多く、曲り果が目立った。

以上の結果から、白いぼキュウリの施設栽培では夜間の室温を12℃程度に維持することが必要で、品種によっては14℃まで高めた方が収量、品質が安定する。変温管理を行う場合は夜間後半の室温を12℃程度とするのがよい。9℃まで低下させると減収する。夜間定温管理に対する変温管理の効果は明らかにできなかった。



第1図 収量に及ぼす夜温の影響 (区当たり)



第2図 夜温管理法と収量